

信仰の醍醐味

私は信仰の味に就いて世人に告げたいのである。天下何物にも味のないものはない。物質にも、人間にも、生活にも、味の無い物は殆どあるまい。人生から此味を除いたら、文字通り無味乾燥全く生の意欲は無くなるであろう。従而人間が生に対する執着の根本は、味による楽しみの為である——といつても過言ではあるまい。信仰にも味のある信仰と味の無い信仰とがあるのは当然である。処が世の中には不思議なもので、恐怖信仰というのがある。それは神仏を畏怖し、戒律に縛られ、窮屈極まる日を送り、自由などは全く無く、常に戦々兢々たる有様で、斯ういう状態を私は信仰地獄というのである。

本来信仰の理想とする処は常に安心の境地に在り、生活を楽しみ、歓喜に浸るというのでなければならない。花鳥風月も、百鳥の声も、山水の美も、悉神が自分を慰めて下さるものであるようと思われ、衣食住も深き恵みと感謝され、人間は固より鳥獸虫魚草木の末に到るまで親しみを感じるようになる。之が法悦の境地であつて何事も人事を尽して後は神仏に御任せするという心境にならなければならぬのである。

私は常に、どうしても判断がつかぬ難問題に逢着した時、觀音様に御任せするという事にして、後は時を待つのである。処が想つたよりも良い結果を得らるる事は幾多の体験によつて明かである。殆んど心配したような結果になつた事は一度も無いといつても可い。又種々の希望を描くが、その希望よりも必ず以上の結果になるから面

白い。斯ういう事もある。何か悪い事があるとそれを一時は心配するが、きっと良い事の前提に違いないと思い、神様に御任せしていると、必ず良い事の為の悪い事であつた事が判り、心配したのが馬鹿らしくなる事さえ往々があるので、實に感謝に堪えない事がある。要するに私は奇蹟の生活者と思っている。私が言う信仰の醍醐味とは即ち此様な次第である。